

晶石及螢石あり

又鑛脈を研究するに際り其鑛物及び之が構造に注意するの外其走向 (Strike) 及び傾斜 (Dip) の角度を測知すること緊要あり何んどあれば或る地方に於ては鑛脈は地層の走向及傾斜と略ば一致することあればあり又之と同時に其岩壁たる岩類即ち母石 (Country-rock) の性質と斷層の組織とを充分明らかにすることを要せり

此他偽脈 (False vein) と稱するもの此脈は地表より水成作用によりて裂隙より土類及有機物質を流し込みて成りたるものにして以上の二脈は其實結晶岩類或は鑛物より成れども偽脈は之と全く其組織を異にし岩類の屑碎物より成るを以て容易に其水成作用より來れることを會得すべし
前に説ける如く鑛脈は岩層を縦斷し或は之と平行すをも岩質片々容易に之を離剝し得べき岩類假令ば粘板岩、千枚岩等に於て其の層の傾斜甚だ急なる所に生ずる鑛脈は岩層の方向に伴ひ概ね頗る遠きに達せり是れ地動作用は此の種の岩石を縦斷するより之に沿ふて破裂するの遙かに容易なるに由れり

以上説く所のものは岩脈及鑛脈の状態を寫せる大要にして是より裂隙及脈の各種類及出來方の大概を記し成るべく其例を九州の鑛山に取らんとす

(未完)

五家庄途の記

不老庵主人

元曆以還、平家の子孫籠れりといふ五家庄は、天下に數ある未開の地なれば、此熊本に生れし我、否に

も應にも一見し置かてやは、とは兼て思ふ所ありしも、人事意の如くならずして、荏苒昨年に及びしが、昨春幸機を得て、年來の願を果しぬ。其途上のこと聊うこゝに書きつく。

四月一日 天氣快晴、同行十人校門に會す。何れも手布を肩にして草鞋を穿ち去が、唯天狗、飛雲の二人は、下駄にて五家山中を踏破せんとて、態と草鞋をば穿たず。午前七時出發、捷路を辿りて、全九時、御船往還の中ノ瀬より出づ。これより此往還を行き、上嶋といふ所より、御船川に沿ふて上ること二里、正午時數分、御船に着く。こゝにて晝餉して發す。それより小坂を過ぎ、再び平地に出で、一里半許行きて、甲佐より御船と熊本への別れ路に出づ。橋あり。ろをより甲佐往還を數町上れば緑川も出づ。川傳ひに上ること半里許にして、甲佐岩下町に着く。甲佐より半里許行きて豊内といふに着く。春日暖かにして汗流るれば、皆肩脱ぎて喘ぎつゝこゝまで來れば、緑川の水を堰き分けて、池を湛ふるあり。池岸松櫻の古木聳えて枝を交じへ、日光透らず、打見るに涼風至る心地す。傍ら茶店あり、憩ひて茶菓食ひ水飲みあどす。辻古菓子を開くものあり。「船出よま」と出たれば、五家の山にわけ入る我等に、船出よしとはふさはしからずといへば、一人かくぞつゞけ入る。

青空を青海原と見るとききは山にのぼるは船出なりけり

店婦曰く此堤を行かれば、先きに櫻馬場あり。八丁程つゞけり。一三日前盛にて今は半散りぬべしといふ。ろは惜しかりけりといひて、行く先きの路悉しく問ひて立ち出づ。こゝにて田舎先生と奇々妙々の會話あり。記さず。さて河傳ひに上ること數丁、皓々とて白雲の如く、霏々として梢雪の飛ぶが如きあり。これを店婦のいひし、櫻馬場の盛過ぎたる櫻花ありける。残りなく散るぞめでたき櫻花、今は盛過ぎぬ、見ばへまきあどまは、ことにかたくあゝる人ぞいふめる。習々たる和風に誘はれて、

紛々として亂れ散る花の、面を撲ち袂は入り、或は水の阿にしがらこて、水さきまでよ見せしむるなど、盛の花に劣るべきかは。時よ黄鳥の睨睨として、花間に囀るも、折知り顔なり。是ぞ畏長さ勅題の鶯花契萬春あると、一人いへば、一同案を拍て、然りくと和す。眞に限り知られぬ、太平の御世の樂あり。

馬場より數丁行けば上揚かみあげなり。こゝに村社あり。巨木聳えて涼しくれば、暫らく憩ふ。こゝにて渡しを渡る。對岸は寒野さむのあり。これより上り坂いと長き。流汗シャツを濡はして、絞るばかりにあり、喘きく僅かに上り詰むれば、向ふに五家の諸山見ゆる。巔には殘しの雪なほ鹿ノ子斑あり。今の小坂だにかく辛勞しぬ、四月の暖天に猶雪ある、彼の山を越えて困難思ひやらると一人いへば、何でふさる事のあらん。大方事は氣の作用にこそあれ。彼山に攀づるに攀づる氣あり。一氣奮發せば、これを踏破する物の數かは、と例の飛雲威丈高にありていふ。坂を下れば名越谷といふに出づ。こゝより平地一里許行きて原町に着く。時に午後三時。然るべき宿求なるまゝに、一同投宿す。

既に晚餐を終りて、餘り徒然あるまゝに、一盃の議出で、立ろに成り、酒盃を呼ぶ。されど僻地にしてお下物なければ、一人曰く、此地五家と交通絶えず。此宿の主人、五家の事知らぬことよもあらじ。物語らせて下物にせば如何にといふ。然るべしとて呼び上げせて語らす。亭主曰く、五家路の險惡あることは、言語に絶えたり。斷崖に小徑を通したれば、一步を誤らんには、千仞の谿に陥りて、逆も六ヶ敷き所なり。殊に其路は粘質ある土壤にあらず、堅緻ある岩石にあらず。小粒の石の極疎に積重なりたるれば、雨の日などは、更に踏留めなし。此を聞きて予曰く、さては雨に逢は、滞留する外なきや。亭主曰く、然り。雨天には右の如くすれば、嚮導するものもよもあらじ。嚮導あつて五家を廻

らんは、闇夜に燈なきに同じ。必らず山奥に迷ひ入りて、干死する外なし。又よしや路は知れたりども一たび失脚しなば、先づ六ヶ敷き方あるべき。此兩日に淹留せざるべからずとの説は、痛く予を困めぬ。予は此九日を以て、徴兵検査に應せざるべからず。若し不幸にして雨に逢ひ、二三日も五家山中に滯ることあらば、如何にせんと思へり。然れども予は決心しぬ。一たび蹈み出したる路を、こゝまで来て引き返さんは、馬鹿氣た話あり。雨降らば降れ。樅木おでありと、推原迄ありと行きて、巳むを得ずば、これより引き返さん。一度來し路、嚮導も何も入るものかは。雨降りぬども、一步々々重心の在り所を定めて進まば、何ぞ失脚の憂あらん。行くべしと自ら一決せり。さてこゝより先づ何處へ行き、何處へ廻りて、歸るべきふといふにつきて、亭主途上の危険のみ頼りに説きて、果てしなげきは、遂に樅木より推原に、推原より五木、四浦に出で、人吉に着き、さて船みて球磨川を下り、八代に出で、歸宅と定めり。然るに亭主又曰く、雨天には人吉より舟を出さずと。こゝには予再び閉口しぬ。幸ひ天氣續にて人吉に着きても、こゝにて雨に會は、如何にせん。よし、行く先きは唯天のこ。行けやくと同音に言ひ放ちて、亭主の長談義を絶つ。時に酒は夙とに盡きて、時計は既よ十一時を報ず。一同就暮、天狗此夜二十八字を得たりといふ。

四月二日快晴 五家の千山萬嶽を繞りし夢覺むれば、一同は既に起きて結束よ忙はし。鹽嗽喫飲を終りし時、下婢は昨夜命し置きたる白米二斗、草鞋二十足、生味噌三斤を持來れり。これは五家山中に、三日の命を維がん料なり。(されど一人に付二升宛にては不足なり。一人三升は用意せざれば、眼の玉の出づる目に逢ふべし)さて此米を、或は革囊に、或は包み、袋杯に二升乃至三升宛入れて背負ひ、七時宿を立つ。町外れに少し上り坂あり、これより漸く山路にありて、銚川傳ひあり、土喰つちくみより一里程行

けば、早楠はやくすといふに出づ。こゝを過ぐれば彌雁侯峠の長坂にて、五家の難路に入るあり。民家よ入りて
道尋ぬるよ、只今牛牽きの五家尻り通りたり。追ひ付き玉へ。それこそ安全よといふに、たゞいゝと
喚きながら、小走りして跡追へど、影も見えねば、馬鹿くしかりしと呟きてさてやむ。さて愈登り
かゝれば、木はなくて一面童山なり。未だ一合目迄も来ずと思ふに、一同早話もなくありて、唯「熱さ
く」と喘聲どのを聞ゆ。少ま平なる處に憩ひて、又登るに、樹は固よりなく、草は益々短くて、一面に
野生の菜の、火箸の如くあるが、疎らに生へて花盛なり。三四合目迄は馬背を行くが如く、高處を傳ふ
て道あり。そまより山の側面の崖に徑通する故、處々に樹蔭ありて、清水の滴る所あどあり。やゝ行
くに向ふより老婆の板負ふて來るあり。これぞ五家人あらんと思ひ、行く先きの路の樣を問ふに、今
迄の道は物かは。此先に行かれば幾倍か悪しといふ。さて御身は何處のものぞと問ふに、仁田尾
のものと答ふ。見れば年は六十路に遠からじと見ゆるに、身に着けたるは、和布わふちの如き綱縷、髪は斑白
あるが、搔き撫で去跡もあく、火の燃え付かん程ればるあり。いと大なる杖にすがりて、板一坪分許
負ひたる。嗚呼是れが六百年前に、金殿玉樓に春花秋月を弄したる、平家の末かといと哀あり。
いよゝゝ行くに、路愈細く、脚下は幾千仞とも知れぬ深谿にて、目も遙かの奥に、岩にせかるゝ奔湍の
聲ぞうくと、松籟のごと聞ゆ。眞に一度失脚せば、轉々又轉々、命助うらんこと逆も六ヶし。昨夜の
亭主が言も、強ちに大言からずとて、これよりかゝる處を「六ヶしき處」と名づく。さて六ヶ敷處幾つ
か過ぎて、五合目許より森林に入る。やゝ行けば、雜木全く絶えて、杉のみとある。これ某農學士の九
州一の天然の大森林といはれし、七郎次の杉山にて、大は十圍に餘るものより。少も三圍に下らぬ古
木の幾千萬株、轟々として雲を凌げる、幾千年や經ぬらん。其下道は晝も小暗き程をれば、暫くこゝ

は憩ふに、汗も収まりて、やがて暑を忘る。涼しさに元氣を復して又登るに、幾もかくて岐路あり。左やよからん、右やよからん、と口々に言へど、若しこゝにて蹈み誤らんには、南無三寶、それこそ生死よと一人か言へば、押しきめて此方へ行かんといふもの一人もなし。よし／＼こゝにて暫し待たんに、五家通ひの一人通らぬ事は、よもあらじ。然り／＼と一決し、憩ひて谿水掬ひて飲みあむす。こゝは早や遠く人間を離れて、山いと深く、青雲のたぎびく今日の天氣にも、小雨うはふるかどとし。萬籟寂とまて太古の如く、唯何からん、聞きもあれぬ鳥聲のこゝ、幽々に聞ゆ。

さて待つこと三十分とあり、一時間とあむすも、人一人來ねば、いつまでかくてあるべき。試みに左路をとりて進まん、行く先き怪しと見ば、こゝまで引き還して右に行く迄をまばとて行く。(後にて聞けば左は牛の通ふ路にて緩、右は捷路にて急、先きは一つに會せりとぞ。かく聞きては長く逡巡せしことを、悔ゆれと詮なし)さて小憩大憩、勇を鼓ぎて進む程に、僅に平夷の處は、汗潦多く、踐滑して仰様に倒れんとまゐること屢なり。やがて一人、嬉しやこゝに好き物ありといふを見れば、小笹の蔭に残んの雪早く見出して、最中食ひ居たり。後るべきかはとて、胃腑の冷々するまで喫して行く。これより上は此處彼處に雪あり。喫みつゝ行き行きて疲れ果たる頃、絶頂に達す。時に正午、こゝに掘立小屋あり。屋根は頭打つ程低く、土上に板敷き並べて、上に席を敷き、中央に爐あり。自在釣に掛けたる鐵罐に、湯の沸きたるにて茶入れて薦む。澁茶をれども田鼻あり。喉は乾けり。幾瓶か飲み盡す。さて下飯にたるもたはあきやといふに、幸鹽鱒あり。絶妙々々として爐火に投して焼きて書餉したむ。主人物語るやう、われは豊前より來れるものにて、鹽物乾物など此邊を商ひ廻れり。されど聞かれよ。一軒訪ひ行きて不用と言はるれば、次の家へは山々谷々を越え行かざる可からず。新來のまれば未だ地理に

譯しからねば、時には道を失ひて日を暮す事もあり。眞に住み憂き世の中よといふ。予聞て思へらく、世間は廣く、人は多きに、此奥山に來つて物商ふとは、此奴中々の好事者よ、さては又世に罪惡を犯して、身の置處なく、此山奥に影を隠したるよてはなきや。かく思へば何となく氣味悪しきに、齧焼く片手に容貌をつくぐ見れば、面臆尋常とは見えす。氣の所爲にや。此邊に枯木兀々として立てり。こゝには態と燒き枯したるにて。これを倒して多く推茸を製すといふ。

さて一時間許休息して、菜茶の料少々どらせて出て立つ。これよりは下り路よ、御さんあれ、二氣樞木も氣勢中々張りて、前に呻きく熱き息付きて、登りたる時とは全く別人となれり。かくて愈行愈速、稍丈夫なる家あり。其傍の標木に葉木村とあれども、其本村は何處あるや見えす。やがて野人の半牽きて四五人連り行くに會ふ。これは樞木より原町へ買物に出て、一泊して今朝我等より早く出立したるにて、先きよ早桶にて、只今通りぬといひし半牽どもは、是ありけり。暫らく其後に附き行きし者、牛歩の遅々たるに堪へねば、過ぎ超えて先に行く。先きの小屋より二里も來にけんと思ふ所より、礮川傳ひにゐる。或は上る時は淙々響々の聲、密樹を隔て、脚下數十仞の底に聞え、或は下る時は同じ流れを掬ひて飲む時もあり。下る時は窈窕たる澗底、樹梢左右より繁りて日影も見へず。上るときは左には高崖峙ちて、右は見渡す限り山又山あり。始め小屋を立ちし時は、此よりは必定唯下り坂なるべしと思ひしも、さはかくて、迭に上り下りなれば、氣勢稍衰るへたれど、一峠乗り越ゆれば下り詰めには、必らず清冽なる水の、左崖より逆下するあれば、之を掬びては一ト元氣を添へつゝ、上りつ下りつ一里半許や來けんと思ふ處より、谿川と別る。こゝより又上り坂とありて、竹林の中を穿ちて愈行く程に、腹中空しくありて、飢甚しく、今はたゆめくもあらざるに、如何にせん、携ふるものは

背上の生米と味噌とのみあれば、之を取出して傍の樹蔭に團樂して食ふ。昔の陳蔡の野にあらざるも、我等の今こゝに飢ゆるは、徧へに我等の道の大にして、天下容るゝ所なければなるべしと一人言へば、腹は耗りても、口は耗らぬものうゑと傍より笑ふ。(先年我友某々等の此地に來りし時も生米を食ひしとぞ)

いでや今一奮發、と重き尻無理に起こして發す。これより山は概椎木のみよて路も夷よして大あり。半里許も來て峠一つ越ゆれば、忽ち三十戸許の人家の山腹に點在するが見ゆ。これ即ち樅木ありき。其入口に留りて、宿泊談判の全權委員を撰ぶに、眼鏡子風采勝れたりとて、推さまで行く。さて區長の家を尋ねて相談せしが、相談疾く調ひぬと覺えて帽を振るに、めでたくも任を全くせしものかあと、評判甚だ宜し。うくて區長の家に入りしうは午後五時頃にやありけん。足洗ひて坐敷に上れば、全面板張にて大なる爐を中央に切り、其上に棟より自在釣を吊し、其傍らに竹ノ簀子を布きて、飯を炊き食器を濯ふ場とす。屋は茅にて葺たるが、用材はいと丈夫あり。但まこゝは區長の家のこにて、其他の家は矮陋言はん方なく、光線の入らざる、空氣の通せざる、物焚く煙は室に滿ちて、窒息すべく、夜に入りても別に燈を點せず、爐に薪を焚きて明を取る。身に纏ふものは皆で洗滌せしとも見えねば、汚垢塗らたらんが如く、五体は洗ふことなしと見えて、蒼黒く汚れたる皮膚に、怪しき光澤あり。實に世の中は、とてもかくてもありぬべきものかな。こゝに生れてこゝに死するものと思はゞ、瑞穂の飯を朝夕に食し、温湯の体に宜しきに浴し、綿布の垢付らざるを着る我等は、天幸の優あるに感謝せざらめや。

區長は道外出して在らざりしが、四十許の男のありたるが、甚だ周旋して、全村を搜索して、辛ふま

て一羽の鶏を得來れり。乃ち今晚二斗程原町より着きぬ、心強く用ひられよといふ醬油を得て、之を煮、爐邊に團欒して之を食ふ。此時家婦出で、一封の書狀を示していふ。唯今郵便參りぬ。恐らく柿迫の役場よりの召狀あらん、讀みてたべといふに、取りて讀めば、婦のいひしに違はず。婦いふ。亭主此間も柿迫まで出て行きぬるに、何事ならん、かく召出の繁なるはとつぶやく。聞けば先年までは、五家庄中の各村は、其村々にて自ら自治の制ありきを、市町村制の實施後は、柿迫村の内へ編入せられて、萬事共同となり、各區の區長は數里の難路を経て、事毎に柿迫の役場に參會することゝありしとぞ。又此郵書を傳達する郵便脚夫は、唯此一封の爲めに、十數里の惡路を經來らざる可からずとは、いかよ不便ならずや。

さて此僻地に、小學の設あるころ聖世の餘澤いと有難けき。(教育の事は今は後に詳にせん)區長に一男子あり、當年十二歳といふ。伶俐愛すべし。同行の一人御身富士山の高さを知るや、と問ふに、一萬二千三百尺と荅へしこそ感すべけれ。天皇陛下の畏るべく、尊ふべきは、先生に聞きて熟知しぬ。參謀本部の地圖を持ちしを示して、この下を流るゝ谿川の末ぞ、かくくの方流れて、八代といふ所にて海には入るよ。と語り聞かすれば、興味ありげに謹聽しぬ。さて吾等は此地のこの聞かまじさに、小學校の教師を請せんとて、人を遣し、も、不在ありしころ憾され。さて爐には槽火盛に燃へて、身も暖まり、夜もやゝ遅くなるまゝに、槽火は其儘燃やしつゝ、毛布に捲られて、爐邊より横臥して眠に就く。

(未完)